

被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味

—石巻市内の小学校における支援活動を通して—

Educational value of volunteer programs in the area affected by the 2011 East Japan Earthquake and Tsunami for the college students

— Reporting on the efforts of students in the department of education
in support of elementary schools —

和井田 節子・田中 卓也・小林 田鶴子・小泉 晋一
Setsuko WAIDA・Takuya TANAKA・Tazuko KOBAYASHI・Shinichi KOIZUMI

概要

共栄大学教育学部は、2011年3月11日の東日本大震災で地震・津波の被害を受けた小学校を訪問し、休み時間に子どもたちと遊ぶ等のボランティア活動を行っている。それが、被災地支援として意味あることであるのはもちろんだが、小学校教諭をめざす本学教育学部の学生にとっても教育的に意味のある活動となっている。そこで、2012年9月に行った訪問支援活動を対象に、引率した4名の教員による観察、参加した学生へのアンケート調査、学生の感想文の分析を行なった。その結果、支援内容が児童や教員に喜ばれていること、学生同士コミュニケーションを取り協力しあう体制ができていることが、学生の心理的な安定と充実感に寄与し、教職への意欲を高める機会になっていた。

キーワード：東日本大震災、大学生、ボランティア、教員養成、小学校

Abstract

In the teacher education program of Kyohei University, we have a program to visit and work as volunteers in the elementary schools in the area affected by the East Japan Earthquake and Tsunami of March 11, 2011.

The primary purpose of the program is to provide long-term support to elementary schools in the area, while offering a meaningful experience for university students who seek to become elementary school teachers. This study evaluates the actual experiences of the Kyohei University students who participated in the volunteer program for two weeks in September, 2012. The evaluation involved observations by the four university instructors who led the volunteer program, participant questionnaires, and reflection papers by the university students. The results indicated that the students had positive feelings about the

experience mainly due to the fact that they were well accepted by the children and teachers in the elementary schools, and that they had built closely cooperative system among them. Consequently, the program contributed to the wellness and their sense of fulfillment of the university students, and increased their motivation to become teachers.

Keywords: East Japan Earthquake, College students, Volunteer programs, Pre-service education for teachers, Elementary Schools,

目次

1. 研究の目的と概要 和井田 節子
 - 1.1. 研究の目的
 - 1.2. 研究対象と研究方法
 - 1.3. 被災地支援ボランティア活動の概要
2. 被災地支援ボランティア活動における学生の連帯意識の形成 田中 卓也
 - 2.1. 授業参加体験
 - 2.2. 休み時間の交流活動
 - 2.3. 児童と一緒にいる教室掃除と明日につなげるための振り返り
 - 2.4. 被災地視察からの学びー今も残る震災のつめあとー
 - 2.5. 課外（授業外）での仕事ープール清掃、イス・机の解体などー
 - 2.6. 先輩・後輩の人間関係の構築と貴重な教師体験ー
3. 学生の体験を振り返ってー学生の感想文からー 小林 田鶴子
 - 3.1. 学生が感じた児童のようす
 - 3.2. 被災地の教員から学んだこと
 - 3.3. 被災地視察のもたらすもの
 - 3.4. 小学校教員志望の学生にとってのメリット
4. アンケートからみるボランティア参加者の心理的な成長 小泉 晋一
 - 4.1. 問題
 - 4.2. 方法
 - 4.3. 結果と考察
 - 4.4. 総合的考察
5. 被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味 和井田 節子
 - 5.1. ボランティアの理念から見た支援活動
 - 5.2. 被災地支援ボランティア活動の課題と考察
 - 5.3. まとめと考察

1. 研究の目的と概要

和井田 節子

1.1. 研究の目的

本研究の目的は、被災地の小学校を訪問して行うボランティア活動が、小学校教員をめざす学生自身に与える影響およびその要因、そしてその教育的な意味を明らかにすることにある。

2011年3月11日に発生した東日本大震災・大津波、そしてそれに続く余震の数々は、東北・関東の広い地域に甚大な被害をもたらし、多くの尊い命を奪った¹。中でも宮城県石巻市は、死者約3,500名、行方不明者約500名と、最も大規模な人的被害を受けた。共栄大学教育学部の学生有志は、2011年から2012年にかけて3度、石巻市内の小学校を訪問して、休み時間に児童と遊ぶ等のボランティア活動を行ってきた。その日程は、小学校は授業が行われていて、大学の授業がない2月と9月に組まれている。

これらの活動は、被災した地域の学校や児童の支援が目的である。しかし、活動を行ってみると、参加した学生たちの方にも、大学教育だけでは得難い学びがあったのが、引率した教員から見てとれた。支援される学校や児童にとって意味のあるボランティア活動にするように努力することはもちろん大切だが、参加する大学生にとっても有意義な活動となるための要因が明らかになれば、さらに充実した支援活動の継続が期待できる。そこで本研究では、被災地支援ボランティア活動が参加学生に与える教育的な意味とその要因の解明を試みた。

1.2. 研究対象と研究方法

1.2.1. 研究対象

2012年9月に行った第3回被災地支援ボランティア活動の参加学生30名を対象とする。その内訳は、1年生25名（男子13名、女子12名）、2年生5名（男子2名、女子3名）である。1年生は全員初参加で、2年生は全員、前年度に参加経験がある（2回目1名、3回目4名）。この回を研究対象とした理由は、それ以前に行った2回の活動と比較して、最も参加人数が多く、訪問先も複数であり、引率教員数も4名に増え²、より客観的なデータが得られるためである。

1.2.2. 研究方法

以下の3つの方法によって得られたデータを検討する。

- (1) 引率教員による観察：引率教員は、本論考の筆者4名である。
- (2) 学生による感想文³の記述：活動2週間後に学生が提出
- (3) アンケート調査結果：活動1ヶ月後に実施

1.3. 被災地支援ボランティア活動の概要

1.3.1. 訪問支援に至るまでの経過

東日本大震災では、共栄大学がある埼玉県春日部市も大きな揺れに見舞われた。そのため翌月の2011年4月に新設された共栄大学教育学部1期生（2012年度には2年生）の入学式は4月下旬まで延期となった。1期生にとって震災は身近な出来事であったといえる。

その新入生の中から、被災地への支援活動をしたい、という申し出があったのを受けて、小学校教諭をめざす学生を育てる教育学部として、被災地の小学校への「長期にわたる顔の見える支援活動」を行うことが教授会で認められた。そこで、被災地支援ボランティアの目的を、『実践力』『教育力』『人間力』とその総体としての「生きる力」を身につける活動の一環』と位置づけた。当初からこの支援活動には、学生への教育的な意味づけもなされていたのである。

犠牲者が多く、まだ余震も続いている地域への訪問であるため、現地の貢献となり、学生の安全も守れるようにすることが必要である。被災した学校への訪問支援活動を5月から始めていた日本体育大学⁴の実践を参考にし、訪問先の学校への下見や打ち合わせを行った。参加を希望する学生には、ボランティア保険への加入、ボランティア参加誓約書⁵の提出、保護者からの承諾書と緊急連絡先を大学に提出してもらった。事前学習で、訪問先の状況や、児童との接し方を教員が説明して支援に臨んだ。

1.3.2. 第1回支援活動の概要

2011年9月に、1期生7名（男子5名・女子2名）と引率教員2名（小泉・和井田）で石巻市立住吉小学校⁶を2日間訪問し、支援活動を行った。

参加希望学生たちは、6回の事前学習後、教育学部の全員で作成したメッセージカードを携えて石巻市立住吉小学校を訪問した。住吉小学校には避難所も設置されて地域住民が校内で生活していたこともあり、学生も空いた教室に宿泊させてもらえた。学生たちは、授業補助や休み時間の遊びによる支援を行い、放課後は、市内視察を行った。市内いたるところにまだ震災の爪痕が生々しく残っていた。終了後は、学園祭で支援報告を行った。

1.3.3. 第2回支援活動の概要

2012年2月に、1期生10名⁷と引率教員2名（小泉・和井田）とで、9回の事前学習・準備と、みんなで作った応援メッセージDVDを持って、石巻市立住吉小学校を3日間支援した。前回同様に児童と遊び、授業で学習補助をした。放課後は被災地視察を行い、被災状況への理解を深めた。この回は、新たに被災時の話を管理職から聞く時間を設けた。また、半日の保育園訪問⁸も行った。校内避難所が閉所したため、小学校内での宿泊はできず、宮城県出身の学生の実家等に分宿した。支援報告は、2012年4月に新入生も対象に行った。

1.3.4. 第3回支援活動の概要

本研究対象の活動である。学生30名が、2012年9月に、石巻市立住吉小学校と石巻市立渡波小学校⁹の2校に分かれ、3日ずつ2週にわたる、のべ12日間の支援活動を行った。10回の事前学習と準備を行った。活動全体を、リーダーとなった2年生が教員と相談しながらすすめた。この回は、児童と接するだけでなく、教員の手伝い（プール掃除、津波をかぶった机椅子の分解と片付け、支援物資の整理など）も行った。この回は参加人数が増えて学生の実家だけでは収容できなくなったため、大半が有料の宿泊所に宿泊した。活動結果は学園祭で報告した。活動内容をポスターにして掲示するとともに、活動を撮影したビデオや写真を編集して上映し、来場者に参加学生が説明する形式で行った。

2. 被災地支援ボランティア活動における学生の連帯意識の形成

田中卓也

2.1. 授業参加体験

渡波小学校では校長からの講話も終わり、2年生の学生から1年生の学生に、その日の予定が話され、ボランティア学生はそれぞれ決められた学年の教室に散らばり、授業に参加した。どの学生からも緊張の様子が伝わってきた。とりわけ1年生については、毎年5月から授業として行われている「学校ふれあい体験¹⁰」で1日、小学校を体験する経験しかできていないので、戸惑いを隠せない者も存在した。しかしながら彼らが参加した授業を受け持たれている多くの担任教員は、多忙な学校生活のなかにおいても、いつもと変わらぬ表情で、はるばる埼玉県春日部市から来た学生たちを招待してくれていた。自己紹介から緊張している学生をよそに、外部から人が来ることにすでに慣れてしまった児童たち、両者がかなり対照的に私の目には映った。しかしながら無邪気で明るい彼らに、学生は緊張を緩和させていった。

2.2. 休み時間の交流活動

渡波小学校では、2時間目と3時間目の間には、20分間の業間休みがあり、多くの児童が外に出て遊んだり、教室で読書したりする。住吉小では昼休みも交流活動を行っていた。この時間帯を利用して、本学のボランティア学生たちはこれまで大学で準備してきた遊び・レクリエーションなどを披露し、多くの児童とかかわりを持ちたいと考えていた。彼らは大学で用意された“共栄大学教育学部ビブス”を着用し、多くの児童の中に飛び込んでいった。「精一杯、子どもたちと関わっていこう」という意志のあらわれのようであった。そのなかには本学ダンス部所属の学生を中心に企画・構想していた「ディズニー・ダンス」、伝統遊びを代表して「ぶんぶんゴマ」づくり、いつでも誰でも参加が可能な「なぞなぞ」などバラエティーに富んだものばかりがラインナップした。この被災地支援ボラ

ンティアをスタートするまでに事前学習が行われ、準備をすすめた。被災地支援ボランティア参加者からは、事前学習等で被災地映像を見たり、それに関する情報を知るなかで、「現地の子どもたちの役に立ちたい」という強い意欲が感じられた。

いざ石巻に到着し、実際に活動を始めた学生の様子を見ていると、児童をそれぞれおこなう会場に連れてきて、一緒に行くということなどをしながら、必死に取り組んでいる様子が見えた。ディズニー・ダンスも決して完璧に踊りこなせていたわけではない。しかしダンスを楽しみにして踊りに来た児童の楽しく踊る姿に、皆が刺激を受け、一生懸命に踊ったのである。渡波小学校の児童とボランティア学生が一緒になった瞬間であった。また戸外に目を向ければ、サッカーを楽しむ児童がいた。ボールを必死になって追いかけて、何とかボランティア学生からボールを奪おうとする者、児童自らのシュートをみてほしい、シュートがゴールポストを揺らす瞬間を見てほしい、それではなく単に一緒にボールをパスしあうことを求めている者などそれぞれが楽しんでいた。またボランティア学生も緊張感がとれ、笑顔がこぼれるようになっていった。

2.3. 児童と一緒にいる教室掃除と明日につなげるための振り返り

すべての授業が終わると、渡波小学校では清掃の時間となる。渡波小学校の清掃は昼休みに行われていた。また住吉小学校の清掃は放課後であった。児童はもちろんのこと、ボランティア学生も参加して行く。児童もボランティア学生も掃除の時間には「バンダナ」を着用し、掃除を行う。バンダナの色などの統一はとくにしていない様子であって、自らが好む色のものを使用していた。しかしながら、児童たちは遊びを一生懸命に取り組むだけでなく、掃除においても手を抜かない。またボランティア学生もそれを間近で見ているので、手を抜かない。ある意味での相乗効果であったようにうかがえる。ボランティア学生も、このことで1日の学校生活の流れがつかめることになったのであろう。さらに帰りの会（ホームルーム）や、下校指導も行うことになっているので、最後まで気が抜けない状況が続く。

下校指導も終わり、ボランティア学生たちは一度、「控え室」に戻る¹¹。そこで2年生を中心にその日の振り返りが開催されることになる。16時ごろから開催される振り返りでは、学生一人ひとりが、その日の活動において気づいたこと、疑問・不安に感じたことなどを発表し、互いに教えあい、話し合うものであった。2年生は去年の経験があるため、1年生の発表の際には、これまでの経験からさまざまなアドバイスを行うことが多い。それを聴く1年生は各自のノートにメモを取ったりする光景がよく見られた。誰からもノートにメモを取るなどの指導はなかったと思う。しかし基本がしっかりできていたことには感心した。

1年生も先輩の話をよく聴く姿勢ができていた。このことは今後の彼らの活動において

も大きな功績を残したものと考えることができよう。彼らは2年生になったとき、同じように新1年生に指導ができる、そのシステムが形づくられたのであろう。

振り返り自体はおよそ30分から1時間程度で終了する。しかしこの時間は彼らボランティア学生にとって濃密な時間であることは疑いのないことであろう。終了後、学校の教員にあいさつをし、帰路につくことになった。

2.4. 被災地視察からの学び—今も残る震災のつめあと—

小学校での取り組みのほか、住吉小学校および渡波小学校のボランティア学生は、石巻市内視察を行った。地震の大きさを知ることも被災地支援ボランティアにとって大きな目的であったから、2時間程度であるが、視察に出かけ、震災の大きさを知ることにも努めた。

市内の移動に際しては引率教員が運転した。移動にはレンタカーを利用した。石巻市内をくまなく視察するには時間が不足するということから、おもな見学場所として、①被災した渡波小学校校舎・運動場②女川町（国道に沿った地域・沿岸部）、③雄勝町（国道に沿った地域・沿岸部）、④石巻市立大川小学校校舎、⑤門脇小学校校舎・運動場⑥日和山公園を選び、足を運んだ。

移動中においても学生たちは、車窓から見ることでできる「震災のつめあと」を見ては、言葉を失うことがあった。地震発生後1年半になる時期ではあるが、完全な修復にはいたってはいない。すこしずつ元の生活をとりもどし始めてはいるものの、まだまだ回復には相当の時間、労力が必要になるであろうと、見学したすべての者はそう感じたにちがいない。またその光景を思いとめるために、各自で写真を撮影した。11月の大学祭に毎年、教育学部1年生がポスター発表することがすでに決まっていることが理由のひとつにあったが、学生が個々の自分の意志で、この被災地支援ボランティアに参加していることもあり、全員が心をつなげて、ボランティアとして何か自分たちにはできないのか、という思いを写真撮影を通して肌で感じ、またより一層その思いを強くしたのではないかと思うのである。

また見学予定地に到着してはかならず全員がそこに行き、しばらくの時間、さまざまなものを見学した。彼らの多くは、大学卒業後、小学校教員になっていくことになる。彼らは実際に小学校教員になったときに、「震災」のことにふれないわけにはいかないであろう。その「震災」についての教育も行われ始めている中で、彼らはどのように授業を行い、児童らに伝えていくのかを考える契機になったと思われる。学校のボランティア支援ももちろん大切であるが、実際の被害状況にふれることも大きな災害の学習になったのである。

2.5. 課外（授業外）での仕事ープール清掃・イス・機の解体などー

住吉小学校は、ボランティア学生に対し、プールの水漏れの調査を行うためのプール清掃を依頼した。東日本大震災があり、プールサイドのいたるところには、「ひび割れ」などもあり、目を引いた。ボランティア学生たちは一生懸命に清掃活動を行った。プール用ブラシを持ち、ホースから水を流しながら、時には大きな声でほかのメンバーに声かけをおこない、時には、ホースの水しぶきでTシャツがぬれるほど、明るく楽しく行っていたことが記憶に残っている。指導を行った住吉小学校の教員も「彼らがきてくれてほんとに助かっています。彼らがしっかりやってくれるので、もうしばらくやってもらってもいいですか」とか「今後彼らの成長が楽しみです」などと声をかけられることもしばしばあった。また教頭もプールにまで足をはこんでくれて、学生たちに声をかけたことも彼女らにとって喜ばしいことだった。

イス・機の解体も依頼された。これらは、津波により使えなくなったもので、解体しなければ廃棄できないため放置されていたものであった。

これが、和井田が後述している「被災地特有の業務」の一つであることを学生たちは認識し、被災地の教員の置かれた大変さも理解したようであった。

後述の小泉の調査でも、ボランティア活動を通じた社会性の向上が確かめられているが、清掃活動や解体作業などを通じて、学年を越えて、ボランティア学生の協調性や連帯感が培われていたことが推察される。

2.6. 先輩・後輩の人間関係の構築と貴重な教師体験ー

渡波小学校、住吉小学校での被災地支援ボランティア活動を通じて、3点の教育的意味を見出すことができる。まず1点目としては、先輩・後輩の人間関係を醸成することができたという点である。大学生になると、学生個々で活動することが多くなる。部活動、委員会などに入れば、先輩・後輩という上下関係のなかで活動することになる。しかしながら1年生・2年生のなかには、そういう関係のなかで活動したことのなかった者も少なくない。

このたびの被災地支援ボランティアでは、2年生は1年生に気を配りつつ、昨年の経験を活かしたアドバイスをしていた。1年生は2年生を頼りにしながら活動に力を尽くしていた。集合時間の徹底、意味のある振り返りなどがうまくいったのは、学生同士の信頼関係が構築されていたことにあるのだろう。

2つ目は、小学校教諭の生活そのものを3日間見学できたことである。小泉も後述しているように、教師の子どもへの対応から、学生たちは子どもに対するコミュニケーションの方法を学んでいた。これは大変貴重でまれな機会であった。通常の業務に加えて、被災地特有の業務に追われ、多忙であるにもかかわらず、ボランティア学生を温かく受け入れ

てくれたことは、たいへんありがたいことであると同時に、今後の学生が教員の道に進む上でも大きな学びとなるものであった。

3. 学生の体験を振り返って－学生の感想文から

小林 田鶴子

3.1 学生が感じた児童のようす

今回参加した学生は、「学校ふれあい体験」と2年生の場合は「介護等体験」により、教育現場に出ている。しかし、学生の感想からは今回のボランティアでは、これまでの体験では得がたい貴重な体験をしたことがうかがえる。

まず、初めて参加した1年生の感想文に共通してみられるのは、現地に行って、震災で傷ついた子どもたちとうまく関われるだろうか、という不安と緊張感である。参加前に現地の悲惨な状況の話を聞いたりテレビや新聞などで見たりしている学生たちにとっては当然の思いであり、またそれは逆に言うと「児童を元気付けよう」とする思いが強いことの表れでもあるといえる。

しかし、この不安は「子どもたちは思っていたより活発で元気で、すぐに仲良くなれた」ことにより解消する。そして、最後は「自分たちが子どもを励まそうと思っていたのに、逆に子どもたちから元気をもらった」ことが、学生から異口同音に語られることになる。児童が元気で人なつこかった理由の一つとして、田中が前述するように、子どもたちは外部から来る人たちに慣れていることが挙げられるであろう。

このように、初めは元気だと思っていた児童であるが、そのふれあいが深まるにつれて、被災者であることをうかがわせる言葉や態度を学生が目にするようになる。渡波小学校に行った学生の感想文には「校庭がなく、思いっきり走り回れなくてウズウズしてるんだらうなあと思いました。」や「クラスの中の一番元気な子が『俺は津波の中を泳いだよ』という話を聞いたり、『今日前の家を壊すんだ』という話をきいたりして、こんなに元気な子ども被災者なんだということを実感しました。」と書かれている。そうして、色々な子どもたちと3日間一緒に過ごすうちに、一生懸命生きようとしている姿に学生たちは逆に励まされることになったのだと考える。

3.2 現地の教員から学んだこと

前章の田中も示しているように、住吉小学校と渡波小学校の教員は、私たちが温かく迎え入れてくださった。学生たちは予め決めてあった、それぞれの担当の学年に入り、授業の見学や場合によっては授業の補助を行った。その時の学生の感想には、「授業を見学するだけでも大変勉強になった。」「先生の生活指導に子どもたちには強い人間になってほしいという思いが強く伝わってきた。」とあり、中には、授業を観察していて気がついたこと

を次のように具体的に列挙している学生もいる。

- ・先生が話すときは必ず全員の行動を止めさせて話を聞かせる。
- ・生徒の発言に「いいです」「違います」と反応させる。
- ・考えさせるときは班ごとで考えさせて代表者が発表…等

3日間を通しての感想としては、「学年ごとに生徒への対応や接し方が違った」などが挙げられている。

また、他大学からの教育実習生がいたクラスにたまたま入った学生は、「授業の注目点、生徒との接し方など、たくさんのことを教えてもらいました」と、まさに教育実習で学ぶことも知る機会となったことが示されている。

特に、教員自身も被災して生きのびた人であるため、何があっても「命」は守らなければ、という思いが根底にあり、子ども一人ひとりを大切に作る姿が強く表れていた。そうした姿を「理想的な教師を見た思いがする」「自分の目指す教師像ができてきた」と感想に書いた学生もいる。そして、教師の理想像を見たとき、「教員になりたいという意志が固まった」と、自分の進路についての確かな手ごたえを見出した言葉が示されている。

これに加えて、渡波小学校の教頭からの、震災時に避難した時の生々しい話は、現地にいる人しか感じるこのできない恐怖感と同時に、教頭としての使命感が現れた言葉であったため、学生は「今回の災害は絶対に忘れてはいけないんだという責任感も感じましたし、自分が教師になったときにしっかりと児童の命を守らないといけないんだという責任感も感じました」と記し、非常時における教師の使命についても考えるようになっていくことがうかがえる。

3.3 現地視察のもたらすもの

今回、筆者自身が石巻を訪れたのは3回目である。初めは震災の約2ヶ月後の2011年5月初旬であった。その時は、まだ震災直後と言って良い状態で、地震で倒壊した建物や津波の爪あとが至るところに残り「この地面が一度海底になった」と感じられるほどの潮の臭いと海草が散乱する生々しい光景が広がっていた。16年前の阪神淡路大震災の現地に2週間後に入った時も言葉を失い、「戦後のような焼け野原」に立ち尽くすしかすべがなかったが、石巻では「この世のものとは思えない光景」に、自分がどこにいるのかもわからないような感覚に襲われた。

1年半を経た今も、女川などの地域にはこのような震災直後の姿を留めているところが多くあり、そこを訪れた学生は「言葉を失った」「テレビなどで見るのと実際に見るのでは大違い」との感想をほぼ全員が漏らしていた。また、大川小学校、相川小学校を訪れた学生からは、「津波の怖さ、辛さ、痛みをしらない私たちが、被災した建物や土地をみて感傷的になることは失礼なのではないかと思っていましたが、それでも2つの小学校を見

たときは苦しかったです。わたしたちに出来ることは、この被災している状況を伝え、次に津波が来たときにどういった対応をとるか考えることだと思いました。」という感想も書かれていた。被災地に足を踏み入れた者としての使命感もうかがえた。

一方、住吉小学校のある石巻駅付近は復興もかなり進んでおり、感想文にも「思ったより復興していた。」と書かれている。しかし、昨年住吉小学校に行き、今回渡波小学校に行った2年生からは、「前回行った学校と同じイメージで行ったら、衝撃を受けた。同じ被災地でも大きく異なっている。」という驚きが示されていた。同じ市内でも色々な場所を視察することによって復興が進んでいない場所も多く存在していることを知り、テレビなどで知らされていた「点」としての情報が、広がりをもった「面」として、そして人々が生きている「空間」として実感できたのだと考える。

また、後半のグループが石巻を訪れた9月11日は、まさに震災から1年半後のその日であり、14時46分には全員で黙祷を捧げ、町全体が人びとの祈りの心で静まりかえる瞬間を肌で感じる事ができた。

3.4 小学校教員志望の学生にとってのメリット

筆者の2回目の訪問は、1.3.1で触れられている、日本体育大学の学生と共に行動をした2011年の9月であり、今回の訪問のちょうど1年前である。その時も、小学生との遊びが支援の中心であったが、震災のために半年遅れて実施された体力テストの測定のお手伝いも行い、この時の学生は、自分の専門性を生かして、ハンドボール投げのお手本を示したりしていた。これと比較すると、今回の支援は専門的な内容よりも、小学校での休み時間を中心とする生活の支援や、様々な教科の授業見学（補助）であった。その分、学生は全体的な子どもの心理状態や学校生活全般を敏感に察知していた。

そうした学校生活全般を通して、学生たちは「自分たちがしっかりとしなければ」という思いが継続しており、その気持ちを児童が受け止めてくれた時の喜びは大きく、学生たちは、大学の授業では見せないような笑顔を振りまいていた。このことは、感想文の「今回はとても充実したボランティアだった。是非今後ともこうした活動に携わりたい」という言葉からもうかがわれる。このように、小学校教諭志望の学生にとって、被災地支援ボランティアは多くのメリットをもたらすものだと考える。

4. アンケートからみるボランティア参加者の心理的な成長

小 泉 晋 一

4.1. 問題

東日本大震災の後、被災地支援のためのボランティア活動がさかんに行われ、ボランティア活動の意義が再認識されるようになった。ボランティア活動の成果は、さまざまな

機関や団体から報告されている。例えば茶屋道・筒井（2012）¹²は、被災地である福島県いわき市に看護学科の大学生を引率して、ボランティア活動を行った体験をレポートしている。このレポートでは学生たちの感想が紹介されており、その「語り」の中から対人援助職志望の学生が被災地でボランティア活動を行うことの教育的意味が考察されている。すなわち、被災者とその場での関係をつくり、彼らの置かれた状況や心情に共感をしつつ多様な価値観にふれる体験そのものが、対人援助職の基盤となりうる重要な要素を培うことが指摘された。多田内・重永（2012）¹³は、東日本大震災以降にボランティア活動を行った幼児教育学専攻の短期大学生を対象にしてアンケート調査を行った。その結果、多くの学生は、最初のうちはボランティア活動が「自分にとっては良い経験になる」といった利己性・自己啓発的な動機に基づいて活動を行っていたのだが、継続するうちにこの動機が「人に感謝されて喜びを感じた」といった利他性の動機に変わっていくと述べている。

共栄大学教育学部も有志の学部学生を募り、被災地である石巻市内の公立小学校にボランティアを派遣した。参加者のほとんどが小学校の教員を志望している。今後も支援活動を継続させるためには、学生のボランティア活動を支えている要因を検討することが不可欠である。また、教職志望の学生をボランティアとして被災地に派遣することの教育的意味を検討することの意義も大きい。本研究では、これらの点を考慮して、被災地でのボランティア活動を支える要因とボランティア活動の教育的意味について、活動後のアンケートをもとに検討する。

4.2. 方法

4.2.1. 調査対象

共栄大学教育学部に所属する学生で、2011年度および2012年度に実施した石巻市内の公立小学校でのボランティア活動に参加した学生22人を対象とした。教育学部1年生が16人（男性9人、女性7人）で、2年生が6人（男性3人、女性3人）であった。参加回数は1回が16人で、2回、3回、4回がそれぞれ2人ずついた。参加回数が1回であった16人は全員1年生である。ボランティア体験をした学校は、住吉小学校が7人で、渡波小学校が10人であった。残りの5人は両方の小学校を体験していた。

4.2.2. 手続き

2012年9月に行ったボランティア活動が終了してから、約1か月後にアンケートを実施した。質問は大きく分けると4つあり、これらの4つには複数の下位項目がある。

最初の質問は「ボランティア活動をするにあたって、①から⑥までの項目は、それぞれのくらいあなたの支えに（助けに）になりましたか」という内容である。この質問は、学生がボランティア活動をするときに、何が活動の支えになったのかを検討するために設け

たものである。①から⑥までの項目とは、①仲間たち、②引率教員、③現地の先生方、④児童たち、⑤地域の人たち、⑥宿泊先の家族の6項目である。これらの項目に対して、それぞれ「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの5件法による評定を求めた。さらに、上記の6つ以外に、こころの支えになったものがあれば記入できるように自由記述の欄を設けた。なお、⑥の「宿泊先の家族」とは、一部の学生たちは地元出身の学生の実家に宿泊したので、この宿泊先の家族のことをさす。多くの学生が謝意を示していたことから、敢えて質問項目の中に含めた。

次に、「①から③の項目は、ボランティア活動中に困ったことがあったときに、あなたの気持ちを落ち着かせたりするのにどのくらい支えに（助けに）になりましたか」という質問を設定した。そして、①事前学習、②毎回の振り返り、③引率教員の3項目についてそれぞれ5件法による評定を求めた。さらに、困ったときや不安になったときに、どのようにしてそれを乗り越えたかを自由記述で記入する欄も用意した。

3番目の質問では6つの項目を用意して、ボランティア活動をとおして学んだことに関する質問を行った。この6つの項目は、「子どもへの対応が以前よりもできるようになった」「訪問学校の教師の授業方法が参考になった」「理想の教師像が見えてきた」「子どもに対するケアが以前よりもできるようになった」「教師になりたいと思う気持ちが以前よりも強くなった」「ボランティア活動をとおして、さまざまな面で自分自身が成長したと思う」の6つである。これらの項目も、すべて5件法による評定である。最後に、成長した面があるとすればどのような面で成長したと思うかについて、自由記述による回答ができるようにした。

4番目の質問では、今後のボランティア活動に取り入れたい活動などについて自由記述による回答を求めた。

4.3. 結果と考察

4.3.1. ボランティア活動を支える要因に関する質問

最初の質問は、ボランティア活動を行うときの支えになった要因について尋ねたものである。この質問の結果は、表1に示したとおりである。それぞれの質問項目に対して、「非常に当てはまる」を5として「まったく当てはまらない」を1としたときの数字が、表の一番上に示してある。

表1をみる限り、ボランティア活動では仲間たちの存在が最も支えになっていたことがわかる。次に、現地の教師や児童たちにも多く支えられていたことが示されている。宿泊先の家族については、地元出身の学生の実家に宿泊した経験ある学生が14人おり、残りの8人は宿泊しなかったことがわかる。この8人については、分析の対象からは除外した。宿泊した14人のうち、13人が非常に支えになったと回答している。また、地域の

表1. ボランティア活動時の支えに関する質問の回答度数

| 質問項目 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|--------|----------|---------|---------|--------|--------|
| 仲間たち | 21(95.5) | 0(0.0) | 1(4.5) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| 引率教員 | 12(54.5) | 7(31.8) | 2(9.1) | 1(4.5) | 0(0.0) |
| 現地の先生方 | 19(86.4) | 2(9.1) | 1(4.5) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| 児童たち | 19(86.4) | 2(9.1) | 1(4.5) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| 地域の人たち | 9(40.9) | 6(27.3) | 6(27.3) | 0(0.0) | 1(4.5) |
| 宿泊先の家族 | 13(92.9) | 0(0.0) | 1(7.1) | 0(0.0) | 0(0.0) |

() 内は百分率 小数点第二位以下を四捨五入

人たちからの支えについては、肯定的な評定をした学生の割合が少なかった。学生たちは小学校内でのみボランティア活動を行っており、地域の人たちと接する機会をもたなかったため、当然の結果であるとも考えられる。

自由記述による回答では「先輩達が、皆がボランティアをスムーズに行えるように、事前にいろいろな準備をしてくれていたため、成功することができた」という記述があり、上級生の役割が重要であることが示唆された。また、宿泊先の家族からの差し入れが有り難かったという記述や、子どもたちの笑顔を見るたびに「どんなにつかれていても元気ももらえた」という記述もみられた。

これらの結果から、学生がボランティア活動を行ううえでは、仲間たちの存在が大きな支えとなっていたことがわかる。また、子どもたちも活動の支えとなっていた。「子どもたちの笑顔で疲れがなくなって」という自由記述の回答がみられたように、子どもたちに喜んでもらうという体験は、ボランティア活動を行ううえで大きな動機づけになっているといえよう。多田内・重永(2012)は、他者に喜んでもらったり感謝されたりする経験がボランティアを継続させるための重要な要因になることを指摘している。本研究の結果は、その見解を支持すると考えられる。

4.3.2. ボランティア活動時の困ったことの助けに関する質問

2番目の質問では、ボランティア活動を行っている時に困ったことが起きた場合に何が支えとなったかを尋ねた。この質問の結果は、表2に示したとおりである。

表2. ボランティア活動時の困ったときの助けに関する質問の回答度数

| 質問項目 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|---------|----------|---------|---------|---------|--------|
| 事前学習 | 5(22.7) | 7(31.8) | 6(27.3) | 4(18.2) | 0(0.0) |
| 毎回の振り返り | 10(45.4) | 6(27.3) | 5(22.7) | 1(4.5) | 0(0.0) |
| 引率教員 | 9(40.9) | 7(31.8) | 3(13.6) | 3(13.6) | 0(0.0) |

() 内は百分率 小数点第二位以下を四捨五入

この表からは、小学校での活動が終わるごとに毎回実施する振り返りが役に立っていたことがわかる。毎回の振り返りは、単に感想や反省点を伝える場ではなくて、情報を共有して困ったことに対する相互支援の場にもなっていると考えられる。ボランティア活動を行ううえでは、毎回の振り返りを欠かさずに行うことが不可欠であるといえる。一方、事前学習は、毎回の振り返りや引率教員に比べると肯定的な回答がやや少なかった。今後は、事前学習をより充実させる必要があるといえよう。

自由記述からは、「仲間に相談した」や「引率教員や友だちに話してスッキリした」、「先輩に聞いてそれがすごい支えになった」、「みんなで最後に反省会をすることで次の日に落ち着いて行動できるようになりました」などのさまざまな回答が得られた。多くは仲間どうして相談をしたり、情報交換をしたりして、困ったことや不安なことに対処している様子がうかがわれる。

4.3.3. ボランティア活動をとおして学んだことに関する質問

3番目には、ボランティア活動をとおしてどのようなことを学んだかについて、自己評定と自由記述とによる回答を求めた。その結果は表3に示した。この表からは、「子どもの心のケア」に関する質問以外は、どの質問項目に対してもほとんどの学生が肯定的に評定していることがわかる。特に「教職志望」に関しては、77%の学生が「非常に当てはまる」を選択しており、18%が「当てはまる」を選択している。このことから、被災地の小学校でボランティア活動をする体験は、教職への意欲を高めることにつながると考えられる。

表3. ボランティア活動をとおして学んだことに関する質問の回答度数

| 質問項目 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|----------|----------|----------|----------|--------|--------|
| 子どもへの対応 | 15(68.2) | 7(31.8) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| 授業方法 | 14(63.6) | 7(31.8) | 1(4.5) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| 理想の教師像 | 8(36.4) | 12(54.5) | 2(9.1) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| 子どもの心のケア | 3(13.6) | 8(36.4) | 10(45.4) | 1(4.5) | 0(0.0) |
| 教職志望 | 17(77.3) | 4(18.2) | 1(4.5) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| 自分自身の成長 | 16(72.2) | 2(9.1) | 4(18.2) | 0(0.0) | 0(0.0) |

() 内は百分率 小数点第二位以下を四捨五入

「自分自身の成長」に関しては、約80%もの学生が、ボランティア活動をとおしてさまざまな面で自分自身が成長したと実感していることがわかる。「子どもへの対応」については、すべての学生が「非常に当てはまる」か「当てはまる」を選択している。「授業方法」でも同様の結果が得られた。ボランティア活動をとおして自分自身の成長を実感するだけ

でなく、子どもの対応の仕方を身につけ、授業を見学することによって授業の方法を学習していることが確認された。「子どもの心のケア」に関する項目だけには肯定的な評定が少なく、「どちらでもない」という選択が多かった。このボランティア活動が、子どもの心のケアではなく、小学校の授業補佐や休み時間の遊び相手に主眼をおいているのもっともな結果であるとも考えられる。

ボランティア活動による自分自身の成長に関する自由記述からは、「子どもにとって聞かれないこと、顔の表情を見て、よく考えて接することができるようになった」や「子どもの様子からどう感じているのかが気づけるようになった」などの子どもの感情に対する気づきが高まったことを示唆する回答がみられた。子どもの感情を敏感に察して、その感情を共感的に理解する能力は、教師などの対人援助職には不可欠である。ボランティア活動をとおして、このような他者理解の力が身につくのであれば、それは大きな教育的意味であるといえよう。これは、茶屋道・筒井（2012）が看護学生を引率して被災地でボランティア活動を行ったときの報告と一致する。

さらに、「被災地での先生方を見て、こういう風に子供と接したり、コミュニケーションを取ればいいのかというのが分かった」などの記述がある。これらの回答は教師の子どもへの対応を見て、モデリングの効果が起こり、学生たちが子どもに対するコミュニケーションの方法を学んだと実感していることを示している。また「児童達に接する態度からどのようにすれば話をよく聞いてくれるか、子ども達の注意をひけるかということも解ってきた」、「子どもに対して、自分からすすんで話しかけられるようになった」などの記述からは、子どもと接するなかで、コミュニケーション能力の向上を実感していたと推察される。

その他の回答としては、「先を見通してものごとを考えるようになった」や「心配りができるようになった」、「現地の子ども達と接する中で相手の事をよく見てどのような対処をすることがベストなのかを常に考えるようになった」などの社会性の向上を示唆した記述もみられた。また、「現地の人が辛くても頑張っているのを視察をして感じたので、自分も頑張ろうという気持ちになり、またもっと何かできることはないか」と思ったという回答もあった。被災地を視察することによって、自分自身の生き方を振り返り、人生を肯定的に捉え直す機会が与えられたことが推察される。学生によっては被災地の視察が自分自身を見つめ直す、有意義な機会にもなりうると考えられる。

4.4. 総合的考察

被災地でボランティア活動を体験した学生のアンケートからは、彼らの活動を支える要因として仲間たちの存在が極めて大きいことが明らかになった。また、訪問先の子どもたちにも強く支えられていた。子どもたちが喜ぶ姿を見て、自分たちの活動の意義を認識す

るようになり、より強く動機づけられるようになったと考えられる。多田内・重永（2012）が指摘するように、最初は単に「経験をしてみたい」といった自己啓発的な動機からボランティア活動をはじめたとしても、活動を続けるうちに「子どもたちの笑顔が見たい」といった利他的な動機にシフトしていく可能性が考えられる。この可能性を検討するためには、ボランティア活動の前後で動機の測定を行い、比較する必要がある。

ボランティア活動を行ううえでは、活動後の振り返りが重要であることも確認された。毎回の振り返りで情報や感情を共有することによって、不安なことや困ったことに対処している様子が見えられた。しかし、今回のアンケートでは、困ったときに訪問校の教員に相談したかどうかは明らかにできなかった。仲間同士で解決することはもちろん大切なことであるのだが、教育学部の学生としては、自発的に訪問先の教員に質問や相談をして積極的に指導を仰ぎ、関わりを求める姿勢を身につけることも重要であると思われる。今後は、このような姿勢を問う項目をアンケートに含める必要があるだろう。

ボランティア活動をして学んだこととして、子どもたちへの対応の仕方が以前よりも身についたと答えた学生が多かった。特に、子どもの感情に対する気づきが増して、それに注意を払うことができるようになったという回答が散見された。共感に基づいた他者理解の能力を身につけることは、教職を志望する学生には重要なことである。これは、ボランティア活動による大きな教育的意味であるともいえる。

他者理解の能力と同様に、子どもとのコミュニケーション能力や社会性の向上を示唆する回答もみられた。ボランティア活動をとおして、学生たちは多くの対人スキルを経験的に身につけ、高めていることがわかる。また、被災地の小学校でボランティア活動を行い、子どもたちと接することで、教職志望がさらに高まることも明らかになった。

今後の研究課題としては、学生の社会性やコミュニケーション能力などの変化をより厳密に測定する必要があるだろう。すなわち、ボランティア活動前後で学生の対人スキルなどがどのように変化するかを、統制群を設けたうえで比較検討する必要がある。このような検討をすることによって、ボランティア活動を行うことの教育的意味についてより有意義な検討ができるのである。したがって、本調査は、ボランティア活動の教育的意味に関するパイロット研究と位置づけることができよう。

5. 被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味

和井田 節子

5.1. ボランティアの理念から見た支援活動

ボランティア活動は、(1) 個人の自由意思に基づき、(2) その技能や時間等を進んで提供し、(3) 社会に貢献することであり、その基本的理念は、(1) 自発性、(2) 無償性、(3) 公共性、先駆性にあるとする考え方が一般的である¹⁴。教育学部の被災地支援ボランティ

ア活動を、これらのボランティアの3つの理念から検討したい。

- (1) 自発性：この被災地支援ボランティア活動は、学生の強い要望を受けて企画され、学生と相談しながら運営している。参加は自由意志であり、参加したことがある学生がリーダーとして企画運営に積極的にかかわっている。
- (2) 無償性：現地への交通費・食費・宿泊代は自己負担である。さらに、事前学習や遊びの準備にも2ヶ月程度かけているが、大学の単位とはなっていないなど、無償の活動となっている。
- (3) 公共性：学生から参加の動機を聞くと、東日本大震災の被害状況にショックを受け、力になりたいと思ったケースが大半である。感想文にも「私でも出来ることがあるのなら何でもしたいと思った(1年生女子)」「子どもたちに元気になってもらおう、元気をあげようと思って行った(1年生・女子)」等の記述が多く見られた。参加した学生は公共性を意識しているといえる。

以上により、被災地支援ボランティア活動は、ボランティアの定義に添ったものであったといえる。

学習指導要領では「ボランティア活動等体験活動」の充実を通して児童生徒の「生きる力」の育成を図ることが推奨されている。教職をめざす学生は、いずれボランティア活動を推進する立場になるわけで、その意味からも、学生時代の被災地支援ボランティア活動は貴重な体験といえる。

5.2. 被災地支援ボランティア活動の課題と考察

(1) 自発性に関する課題と考察

学生の自発的な参加は喜ばしいことではあるが、学生の心にある震災による傷つきへのケアも意識する必要があるだろう。

学生たちの感想文には「被害をテレビで見たのがすごく衝撃的で(中略)、自分は普通に生活していていいのかなと思うこともありました。(中略) そんなとき被災地ボランティアの話を聞いて、少しでも子供たちに元気を与えたいと思い、自分にできることをその場で精一杯やろうと思い参加しました。(1年生・女子)」という類の記述が多く見られる。精神科医の和田秀樹(2011)¹⁶は、震災を直接体験しなくとも、悲惨な状況の映像を見ることが深い心の傷になることもあり得ることに言及し、長期にわたって震災時の映像が放映され続けたことを憂慮している。これは、被災地に行く際に学生の傷つきを深めない配慮の必要性を意味する。

ストレスフルな出来事によって傷ついても、そこから立ち直っていく精神力をレジリエンスと呼ぶが、それには個人差がある。前述の和田は、「無力感」と「孤立感」があること

がレジリエンスを低め、トラウマや PTSD につながりやすいとしている。小林ら (2011)¹⁷ は、2008 年 5 月に発生した中国・四川大地震で被災した中高生への調査から、「自分の感情を自分でコントロールできている感覚（以下「感情のコントロール感」と記述）」と、「周囲から温かくサポートされている感覚（以下「サポート感」と記述）」がレジリエンスを高めるとしている。これらの先行研究から、以下 5 点を満たす体制をつくるのが、学生のレジリエンスを高め、傷つきから回復、または傷つきにくくなると考え、実行した。

- ①大学教員の引率や事前学習の実施による「サポート感」がある体制づくり
- ②体験を語り合う場の設定により「感情のコントロール感」を強化
- ③仲間同士や支援先との関係づくりを強めることで「孤立感」を排除
- ④学生の自主性を尊重することで「無力感」を排除
- ⑤活動の意味づけ等で、児童支援の実感を持ちやすくして「無力感」を排除

ボランティア期間中、学生たちは訪問先の学校から温かく迎えられ、感激していた。「子どもの笑顔に接してかえってこちらが元気をもらった」という感想が多かったのは、児童の役に立って「無力感」を避けられただけでなく、児童から「サポート感」ももらっていた、ということなのだろう。本論文中で田中も述べているように、学生は進んで被災地の教員の手伝いをしようとし、役に立てたことを喜んでいて、手伝いも「無力感」を乗り越える要因になっていたといえる。特に、訪問先の校長・教頭が、忙しい中時間を割いて児童を守った震災時の取り組みや、今検討しているよりよい防災の在り方について学生に話してくれた教育的意味は大きい。学生たちは、自分が教師になって同じ状況に遭遇したときにどうすればよいか、そのためにはどのような準備をしていけばよいかという知識を得たのである。震災という自然からの暴力に対してなす術があるということは、「無力感」からの脱出に寄与すると言える。また、学生たちは、その日の出来事を話し合ったり感情を伝えたりする振り返りの中で「孤立感」を避けるとともに「感情のコントロール感」を得ていたことは、アンケートや感想文から明らかであった。

結果として、事前学習の実施、上級生や学生同士で協力して行った遊びの準備、被災地で毎日行った振り返りなどは、その第 1 目的であるボランティアの質の向上にとどまらず、学生のレジリエンスを高める役割を果たしていたといえる。特に、仲間と励まし合い相談しながらボランティアを行なった連帯感が「感情のコントロール感」を高め、「孤立感」を避けるための重要な要因となっていたのは、田中・小林・小泉らも本論文中で指摘しているとおりである。さらに、準備段階から遊びの種類などの支援内容を学生自身に工夫させるようにして、主体的な支援者となれるように援助することが、「無力感」を避ける役割も果たしていた。

以上のことから、被災地支援を行う際には、①事前に情報を与え、準備をする ②学生

が相互に意見や感想を表明できる場を保障し、必要に応じたケアができるようにする ③ 学生同士や支援先との関係づくりを支援する ④ 学生の自主性を尊重する ⑤ 活動の意味づけを行う 視点が大切であることが確かめられた。

(2) 無償性に関する課題と考察

被災地支援ボランティア活動には、準備も含めて時間・労力が必要とされる。交通費などで2万円以上の費用がかかるため、参加費の捻出も学生にとって切実である。

費用の軽減は難しい。交通費・食費・宿泊費がその大部分だからである。夜行バスや安い宿を使って費用を抑えようとしているが、安全を犠牲にするわけにはいかないため、頭の痛い課題である。

それらの解決策として、定期的・長期的な支援を継続することで、参加を希望する学生が計画的に準備しやすいようにする方法をとっている。一般的に、支援される側も、特定のつながりの中での安定した支援を望む傾向があるので、定期的・長期的な訪問の方が双方にとって望ましいということになる。

費用を捻出するために、資金調達そのものを活動の中を含むこと（販売、寄付活動等）も考えられるが、それも限度がある。むしろ、時間・労力・費用を提供してよかったと思える、他では代え難い質的な報酬が得られる活動にすることの方が有効であろう。本論文の中で田中・小林・小泉が指摘する、参加した学生にとっての質的な報酬を整理すると、以下の5点になる。

- ① ボランティア活動によって被災地への貢献の実感をもったこと
- ② 被災地を実際に訪れることで地元の悲しみや苦労を理解できたこと
- ③ 小学校教諭をめざす学生にとって教職を学ぶ場になったこと
- ④ ボランティア活動における学生同士の支え合いによって人間関係が深まったこと
- ⑤ 児童とのかかわりを通して教職への意欲が向上したこと

支援先の学校の役に立つことが最も大事であることは言うまでもないが、参加した学生がこのような質的な報酬を実感できるようなプログラムを追究していくことも、無償性を維持する上では同時に大切であろう。

(3) 公共性に関する課題と考察

倫理学者のゲーディン¹⁸は、「他者が悲惨な状況や苦痛により助けを必要としていることを知ってしまった時点で、その呼びかけに応じる責任が生まれる」と主張し、その考え方は後に「倫理上の責任」といわれるようになった。参加した学生たちは、被災地支援ボランティアに対して「倫理上の責任」を果たそうとするのに近い感覚をもっていた。その「何とか力になってあげたい」という思いは、「公共性」につながるものである。とはいえ、「倫理的責任」には、どこまでも、という側面があり、「無限責任」という名前がついているほどである。東日本大震災の場合も、被害があまりに大きいため、その復興にはまだ多

くの時間が必要である。そういう大変な実態を知って、学生たちの中には被災地を後にして大学に戻ることに後ろめたさを感じる者もいる。だからこそ、一定の制限をつけて「有限責任」にする体制が必要になる。

限定的・定期的な継続性を保つことは、学生に大学に戻ってもつながり続ける道を開くことになるから、罪悪感のある程度防ぐことができる。被災地にとっても、固定的で定期的な関係の方が安心だという。支援する学校や地域を固定して、人間的な交流を基本に継続的に支援を続けるやり方は、双方にとって良いといえる。

ボランティアから戻ったら、報告の場で被災地の学校の様子と支援の必要性を学生の視点で広く伝えてもらっている。それが支援活動全体の総括と次回の支援について考える機会にもなっている。報告会が、次の支援のスタートにもなっているのである。

5.3. まとめと考察

被災地の小学校で休み時間に児童と遊ぶ活動を中心にすえたボランティア活動には、これまでに教育学部学生全体の約 1/3 が参加している。その全員が、「行ってよかった」とアンケートで回答している。被災地の学校・児童の役に立つことで自己効力感が高まったり、知らない土地で仲間と協力しながら支援活動を行い、連帯間が高まったりしたことが、肯定的な感想につながったと考えられる。

震災の被害は甚大であり、被災の報道を通して心を痛めた学生たちも少なからず参加していた。被災地出身の学生もいた。支援活動の中で、地域の人たちに支えられながらも、貢献できたり、児童と仲良くなれたりすることが学生自身の傷つきからの回復に寄与していた。そうはいつても被害は甚大で、復興は道半ばであり、数日の訪問でできることは限られている。被災地の小学校の教員は、自らも被災しながら、日々の業務に加えて被災地特有のさまざまな業務や児童のケアを日常的に行っており、疲労している。学生たちにとって、現地に行くことが、それらの現実を体験的に理解する機会となっていた。

学生が被災地の学校に入り、できることを探し、学生なりに工夫して支援を継続することは、歩みは小さくとも大切なことである。それは、被災地の学校を応援するという意味にとどまらず、教職をめざす学生が、ボランティアの精神を学び、児童を理解し、防災を学び、困難を乗り越えて他者の役に立つ良さを学ぶという、大事な経験の場になっているからである。

謝辞

本論文にもあるとおり、石巻市立住吉小学校と石巻市立渡波小学校のみなさまをはじめ、多くの方のご厚意・ご協力が活動の支えになり、結果として良い学びの機会となりました。心より感謝申し上げます。

- 1 1道1都10県の人的被害の合計は、死者15,72名、行方不明者2777名にのぼった。(警察庁、2012年10月24日現在)
- 2 第1-2回目の引率は小泉・和井田の2名だったが、第3回は本論文執筆の4名が引率した。内訳は、9月3～5日が小泉・田中・和井田、9月11日～13日は小林・田中・和井田であった。
- 3 共栄大学被災地支援プロジェクト「第3回被災地ボランティア記録・感想文集」2012, 全31ページ
- 4 日本体育大学の実践については、亀山有希(2012)「日本体育大学における東日本大震災復興支援活動の取り組みについて：宮城県における復興支援活動を事例として」『日本体育大学紀要』41(2), pp.179-188 に詳しい。
- 5 参加する学生に対し、支援ボランティアへの積極的な姿勢と安全への配慮をうながす内容になっている。事前学習への参加、ボランティア保険の加入、損害を与えた場合の賠償責任などが含まれている。
- 6 住吉小学校は、海からは3キロほど離れているが、川に近い低地にあるため、津波で浸水し、体育館もプールも使えなくなるなどの被害を受けていた。震災の日、犠牲になった児童は幸いにもいなかったが、たくさんの住民が避難してきた。児童、保護者を含む避難住民を守りながら、食料も燃料も水も電気もないまま、被災後の2日間を過ごしている。校内には、2011年10月まで避難所が設置されていた。
- 7 参加者10名の内訳は、男子5名・女子5名。うち4名は第1回目も参加している。
- 8 訪問したひまわり保育園は、住吉小学校の近くにあり、震災時の浸水により3日間園児を抱えて孤立した経験があった。
- 9 石巻市立渡波小学校は校舎が津波に破壊され、犠牲者も出た海辺の小学校である。現在は石巻市立稲井中学校校庭に建てられた仮設校舎で学んでいる。児童たちは避難所等からスクールバスで通う。設備の不足、校庭の共用などで、運動できる場所は少ない。また、放課後はすぐスクールバスに乗るため、昼休みに清掃を行っており、遊ぶ時間が少ない。
- 10 「学校ふれあい体験」とは大学に入学した1年生の時期に、本学(共栄大学)と連携協定を結んでいるさいたま市内および春日部市内の小学校において、授業の補助や学校行事への参加などを通じて、小学校教員の仕事を学んだり、授業などの児童の指導方法をもっとも間近で体感する“体験型授業”のことをいう。学生は年におよそ8～9回程度、担当する各小学校に出向き、小学校現場を体験している。
- 11 「控え室」は、本学学生ボランティア、引率教員のための会議・食事・休憩室として渡波小学校では1Fの音楽室、住吉小学校では1Fの小会議室に設けられた。学生らはここでボランティア活動の事前準備をしたり、振り返りなどを行うなどで活用した。使用後は学生らで清掃活動も行い、翌日の活動に備えた。
- 12 茶屋道拓哉・筒井睦、「東日本大震災におけるボランティア活動の教育的意義」,九州看護福祉大学紀要, 12, 2012, pp.25-37.
- 13 多田内幸子・重永茂、「東日本大震災後の幼児教育学科学生のボランティア活動に対する意識の変化」,久留米信愛女子短期大学研究紀要, 35, 2012, pp.67-81.
- 14 文部科学省『生涯学習審議会答申』1992年。数字は筆者による。
- 15 和田秀樹,『震災トラウマ』,KKベストセラーズ, 2011, p.26, pp.127-129
- 16 小林朋子・吉沅洪・陶新華,「震災による喪失体験と子どもの問題行動との関連について—子どものレジリエンスの観点から—」,教育心理学研究, 53, 2011, p.567
- 17 山本英輔「支援に関する責任」日本心理臨床学会監修、同支援プロジェクト委員会編『危機への心理学—91のキーワードでわかる緊急事態における心理社会的アプローチ』,遠見書房, 2011, pp.18-19